

第1回 武蔵野市子ども自然体験委員会

日 時：平成15年12月15日（月）
18時30分～20時30分
場 所：市役所 5階 教育委員会室
出席議員：安藤委員・石井委員・梅田委員・川住委員・鈴木委員
高石委員・永田委員・宮寄委員・藁谷委員
武蔵野市：事務局 子ども家庭部長・教育部長 ほか9名

1. 開 会
2. 委嘱状交付
3. 委員会設置説明（子ども家庭部長：小森）

市では、現在、平成17年度～26年度の今後10年間で展望した総合計画『武蔵野市第四期基本構想・長期計画』の策定を行っており、「多様な形式での市民の参加」と「実効性の高い計画の作成」ということをポイントにおいて検討をしております。

「子ども施策」については、子ども数が減少しているにもかかわらず、児童福祉費は増大していくという現状において、「子ども施策」をもう一度検討しなおすとともに、「自然体験」または「食」というような『体験の重要性』が注目されてきています。

様々な体験や活動は、子どもたちに豊かな人間性や自ら学び考える力を身に付けさせます。特に「自然体験」は、自然の厳しさや恩恵を知り、動植物に対する愛情を育むなど、自然や生命への畏敬の念を育て、自然と調和して生きていくことの大切さを理解する貴重な機会となります。

本市では、『セカンドスクール』や『むさしのジャンボリー』などの青少年を対象とした自然体験事業を実施してきましたが、今後も自然との触れ合う機会が少ない武蔵野市の子どもたちに自然体験の機会を増やしていくためには、家庭・地域社会・行政が連携して取り組んでいく必要があります。

今回は、テーマ別市民会議『子ども自然体験委員会』ということで、

各分野でご活躍されている皆様にお集まりいただき、要綱にもあるように「武蔵野市の子どもたちの自然体験のあり方」から「具体的な方策」やその他についてまでご検討いただきたいと思います。

4．委員紹介・事務局紹介

5．正副委員長選出

委員長には梅田委員が選出され、副委員長には石井委員が梅田委員長により指名された。

6．子どもの自然体験について

第1回目である今回は、各委員さんの自己紹介も含めて、それぞれのお考えをお話し願います。

藁谷 久雄 委員

私は、『NPO法人国際自然大学校』の校長をしております。様々な事業を実施し、「自然の中で他者との人間関係を学ぶこと」「自分の人生を挑むこと」を体験してもらう中で、人生を前向きに生きる『アウトフitter』を育成することを目的としております。年間を通し、継続して子どもたちと関わっておりますが、以前には「長期自然体験」として、30泊31日の事業を実施したこともございます。

今の子どもたちは「3間がない」と言われています。「時間がない」「遊ぶ空間がない」「仲間がない」ということです。そして自然、異年齢、農・奉仕作業、規則正しい生活習慣というような体験が欠落しています。このような問題に、大人が意識的・計画的に携わるということは寂しい気もいたしますが、有効な手段だとも思いますので、よろしく願いいたします。

宮崎 純子 委員

私は、「武蔵野市PTA連絡協議会」の会長をしております。実際に子どもを学校に通わせている「受け手側」の代表というつもりで参加させていただきます。子どもが「セカンドスクール」などの自然体験事業を通し、虫にも触れることができなかつた子が、都会はイヤと言ったり、友人と高尾山にハイキングに行くというように、すっかりたくましい子どもに変わっていくのを目の当たりにした親として、子どもたちにとって幼児期のそのような体験というものが、大人が思っ

いる以上に大きなものではないか？とっております。

永田 秀樹 委員

20年間、雑誌の取材や編集長の仕事をしつつ、アウトドアクラブの育成をしていましたが、「自然環境」や「体験教育」等に関しては、まったくの素人でございます。1993年「TAMAらいふ21」の一環として、多摩32市町村の中・高校生たち100人からなる『ハバロフスク自然探検隊』を派遣した時には、山岳隊の隊長として20名の子どもたちと一緒に行動し、現在でも濃厚な交友関係は続いております。その中には「ちょっとした自然体験が、彼らの人生をまったく変えた。」とも言えるような子どももおります。また、自分自身の子どもたちへの自然体験の実施経験等もお伝えできれば、と思っております。

この委員会で考えているのは、

1. 自然は武蔵野市にもある。できる限り活用して、もう一度地元を見つめなおす。
2. 武蔵野市の施設の新たな活用の仕方（冬場の使用など）。
3. 武蔵野市の自然教育の根幹である『セカンドスクール』の客観的評価。

ということです。

高石 好子 委員

唯一の公募委員として、自分の子ども時代を思いおこしつつ参加させていただきます。地域では、主任児童委員を務めさせていただき、『セカンドスクール』を始めとする子どもたちの情報がたくさん入ってきます。特にセカンドスクールで「山の上で食べたおにぎりは、今までの人生で食べたものの中で一番美味しい。」という感想は印象に残っています。また、児童養護施設の山登りもお手伝いさせていただき、子どもたちの様子を直に感じる事ができました。

鈴木 恒雄 委員

私は市立第四小学校の教員で、生活指導主任をしております。ちょうど10年間『セカンドスクール』の企画から実施に至るまで、全てを見てまいりました。『セカンドスクール』の良い点は「教育課程に位置付けられて、全員が参加できる」「最大9泊10日という長期宿泊行事である」ということが挙げられると思います。本当の自然の醍醐味

とともに、人との関わりを通し、子どもたちが変化できる様々なドラマが見られます。教員にとっては苦労も多く大変ですが、携わって良かったと思えるものです。

「学力」とは、いったい何でしょうか？その支えとなっているものは、いろいろな実体験なのではないでしょうか？ということを考えていきたいと思っております。

川住 昌光 委員

武蔵野市在住7年目となります。武蔵野市の『ジャンボリー』をはじめ、利賀村や鳥取県など、自然体験事業をフル活用させていただいております。

特に『むさしのジャンボリー』では、子どもだけではなく、私も指導者として参加しております。『ジャンボリー』の良い点の一つは、「リーダー・サブリーダーの素晴らしさ」で、しかもそれが市のコミュニティの中で、30年間もサイクルとなって続いていることです。そして「子どもたちが素になれる場所がある」ことです。普段は大人が子どもを決め付けてしまいがちですが、2泊3日の短い期間ではありますが、子どもの可能性の大きさを教えられます。

『ジャンボリー』においては、自然環境について皆で勉強していくようなプログラムを盛り込んでいくなど、ますます充実させていくべきであると考えています。また、自然体験活動の中で、食文化・食そのものについても見つめなおしていければと思っております。

安藤 栄美 委員

むさしの・多摩・ハバロフスク協会理事をしております。子どもが『ジャンボリー』・『セカンドスクール』・『ハバロフスク』と参加し、元々興味は無かったのですが、それに引きずられるように関わり、自然を感じてきました。そして今年度初めて、自分の意思で『ハバロフスク10周年記念アムール河下り』に参加させていただきました。

自然は素晴らしいとともに、一番危険なものも自然であります。自然体験学習については、少し大人が手を掛けすぎているとも感じています。むしろ No program で放り出したいぐらいで、手付かずの自然体験を子どもたちに継承していきたいと思っております。

春・夏・秋と様々な事業がございますが、冬を上手に活かす方法がキーポイントとなると思います。

石井 雅幸 委員

私は逆に、今の子どもたちは、そのまま自然に放り込むという状況ではないと思っております。ある意味、手を掛けなければならない。どういう用意の仕方をしなければならないのかを考えるのが、私たちの役割だと思っております。

私は九段小学校で理科を教えておりました、武蔵野市では、昔から「昆虫教室」や「自然クラブ」において、理科を通した人づくりに携わってまいりました。自然体験というのが大きく関わる理科教育は、人間教育だと思っております。

「自然クラブ」も30年を迎え、自然と人のサイクルが出来あがってきました。キーワードは『人と関わること』であると思います。そして、学校教育においても、自然体験学習というものの必要性は感じていますが、「何のためにこれをするのか?」、「どれだけの意味があるのか?」、「そのために何をしたらよいのか?」を常に考えていきたいと思っております。

梅田 彰 委員

私のこれまでの経歴や経験の根源には、「自然との関わり方」があると確信しております。すなわち、自然との接触によって得られた感動と好奇心は、観察力や探求心を深めていき、それが学習欲・想像力・創作力を伸ばすものであると考えております。

私は、恵まれた自然環境に育ったわけではありませんが、祖母と一緒にした摘み草を原点に、貝類や蝶の収集など興味を持っている部分に、どんどん新しい分野の知見がくっついて大きくなっていきました。

会社員時代の私はいろいろな新規分野の事業開発を行なうなど、パスマインダー（道を開拓する人）として、他の人より優れていたようです。その様々なアイディアは、興味をもって覚えた表面活性のある知識がその源泉となっています。

子どもは皆、好奇心を強く持っています。この好奇心を伸ばすための素材として、自然は実に感動と驚異に満ちております。昨今の若者は、自分では何もできず、アイディアのアウトプットがないと言われていますが、これは自然との接触が少なくなったからではないかと考えます。「どうなってるの?と追求して考える」、「自分で工夫し試してみる」といった頭の回路の発達のためにも、良き指導者による自然と接するときの好奇心と観察力を伸ばしてやるような指導や工夫が必要であると思っております。

そして、この委員会では、子どもたちに自然という素材を与えたとして、どのように与え、どのように手を差し伸べるべきか...ということが、大きな議題であろうと考えます。

(事務局)

ありがとうございました。多岐にわたる発言がございましたが、委員の皆様のご共通する考え方としては、

1. 自然との関わり、人との関わり。そのような体験を通じて、子どもはすごく変り、子どもの人生にとっても大きな影響を与える。
2. 本来の理想とはちょっと違うが、今の子どもたちには、そういった経験を用意しなければならないのではないか？
 - ・身近なところでもできるような体験、新たな可能性というものを考える必要がある。
3. 親から子へ、指導者から次代の指導者へというようなサイクル。が挙げられたと思います。

委員 自然体験のあり方を通して、現代の物の豊かさによって失われつつある「堪える・我慢する」という経験を教えていくのも、考えていくべき議題でもあります。

(事務局)

今回は、市で行なっている自然体験施策それぞれのねらい・成果・課題等を事務局からご説明いたします。

(要望資料：市内の『ビオトープ』について(活用状況など))

次回以降の日程について

第2回：平成16年1月20日(火)午後6時30分～

第3回：平成16年2月 9日(月)午後6時30分～
場所は未定。

平成16年5月の提言書まで、月1回ペースで開催予定。

(その他に必要な応じて、体験フィールド見学等も考えている。)